
LION HEART

梶田美香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L I O N H E A R T

【コード】

N 4 1 3 6 G

【作者名】

梶田美香

【あらすじ】

ワインストアで働く晃があるとき偶然桜の木の下で横笛を吹いていた小雪と出会い、だんだんと彼女の心の中の暗闇を目の当たりにしていく……

第一章、夜桜

ひんやりとした風がゆっくりほほをなでていく。徳島の夜の街は一部の飲み屋街がにぎやかなだけで、テレビで不景気不景気と言っているだけあって、ほとんど人は歩いていない。

徳島で一番盛り上がり活気があるのは、はつきりいってお盆の阿波踊りの四日間だけである。芸能人や有名人などが毎年踊りこんでくる。

「踊る阿呆にみる阿呆、同じ阿呆ならおどらなそんなそんな」小さな子どもからお年寄りまで盛り上がるゆいつの恒例行事。そんな熱気なんて感じさせないくらい、静まり返っている冬の徳島の街。

おれ、森下晃。ワインストアの仕事を手伝って半年ほどだった。やっと馴れた仕事。、親戚に頼まれ、手伝うはめになってしまったのだった。

もともとお酒は好きなほうだから苦ではない。ここのお店はワインの種類が半端なく多い。

徳島でも有数の有名なワインから、レアもの、ちょっとマニアックなもの。ワインに合うおすすめチーズなどなど……。徳島でワインを買うなら自分で言うのもなんだが、うちの店はけっこうおすすめだ

お客様に合ったワインを選ぶ自信はまああると思う。

「晃ちゃんお疲れ様。遅くなってごめんね。もう上がっていいわよ。」

おばちゃんがすまなさそうにいった。

いつもより終わるのが遅くなってしまったからだ。急に届けてほしいワインがあるらしくどうしても僕じゃないとだめだというお客様の要望だったためだ。いつもより遅い帰り道。

「そういや、あそこの桜は早咲きだったよな？」

なんとなく思い出したので晃は、両国橋の公園向ってみた。橋と

いつても両国橋は少し短め。新町川にかかっている。徳島の夜の飲み屋街への小さな掛け橋だ。

「やっぱり誰も歩いてないなあ。桜独り占め？笑」

と思っていたがよく見ると先約がいた。

両国の早咲きの下で、まっすぐ前を向いて何かをしていている人がいる。ちょうど僕は両国橋の上にいたのでこの距離では何をしているのいか全く分からない。唯一分かるのは、新町川をさみしうに眺め、さっと立ち去って行っていく姿だけ。

「こんな時間にあの人人何しよったんだろう。」

「ま、ええかそんなこと。」

さつきその人が座っていたベンチに腰かけてお気に入り銀河高原ビールを片手に夜空を見上げた。今晚はよく晴れているので、けっこうきれいに星空が見える。

まずぐ家に直行することはめつたにない。家のものからするとぼくはけっこうな変わりものらしく、周りからはかわつたためで見られていたらしい。

高校三年生の時、周りのみんなが卒業前の忙しいばたばたしているとき、ちょうど車の免許をとったとき、アルバイトで自分なりにめいっばいためておいた貯金で小さな車を買った。で、

「ちょっと出かけてくるわ。」

と母親に言い残したまま一か月その小さな車で高知県の海岸ですごしていた。もちろん毛布もつんで。母親は呆れていたのをおぼえている。

自分がこうと思うとそれがよしやし関係なく一直線。周りの有ことなんて関係ない。そんなんきこえへん。といういきかたをかれこれ28年間してきたから。

家族には大変な迷惑もかけたのは間違いない。

「よし、明日もがんばるか。」

一週間後。

たまたま友達の飲み会に誘われていて、街に飲みに来ていた。

高校からの大の仲良し。晃、寛、慎この三人が揃えば怖いものなし！みたいなところがあつたかな。うんうん。

今の本業をどう軌道にのせるか、最近のお互いの近況報告を含めおの場ので盛り上がる盛り上がる。

四へんぐらい店をハシゴをして飲み歩いた。ふつと両国橋ので、阿波踊りのお囃子の笛の音が聞こえてきた。

おれはなんか無償に気になった。なんか気になった。気になったというか興味を持ったってところかな。気付けばもうお開きにするにはいい時間だったし。

二人に背中を向けて、手を振りながら、

「ほななあー」

二人は同時に、

「へえ？」

かなり酔いつぶれていた慎を寛にまかしてその場を後にした。そしていそいそと公園へ向かった。

黒い編み上げのブーツにジーパンをインしてグレーのコートを着ている髪の長い女の子が夜桜の下で座っていた。

その子はじつと新町川を眺め少しさみしげだった。

近くにいつてみようかどうか晃は悩んだ。ちよつとこんな時間に一人でこんなところにいる女の子。まー気軽にいつてみよう。うんうん。

と、そうこうしているうちに、彼女は和風の細い布袋から細長い物を取り出した。

するとさつきまで猫背気味だった彼女の背中が、すつとまっすぐに伸びたのがわかった。聞いたことのあるメロディ。

「ああ桜だー」

すこしたたどしいが確かに桜だ。それも横笛で吹いているようだ。生で笛の音を聞いたのは初めてだった。阿波踊りのお囃子ぐらいは聞いたことはあるが……。

と今度は阿波踊りのお囃子を弾き始めた。くり返しくり返したどたどしいが、吹いていた。途中息が続かなかつたり、とぎれとぎれだが、彼女は真剣だった。いつも聞いているお囃子の音は太鼓、お三味、お笛のにぎやかなノリだ。

しかし笛だけの独奏とゆうのは、なんともものびやかで優しく、ときには力強さ吹き方でいろいろな表現ができるようだ。

笛の音色はしっかりとれおれの心に響いてしまった。

真冬だけあって阿波踊りの音色なんて静かな町全体に響きわたるんじゃないかと思うほどひとりで力いっぱい吹き続けていた。

通りすがりの人はちらちらと見ていたが。街全体元気がないせい、なんかしけた顔している。

若いのに横笛？たいがいは路上ではギターの弾き語りがほとんど。まさか横笛とは……。ふとした瞬間彼女と目があつた。よし、彼女の近くに行けるチャンス！

「冬のお囃子ってなんかいいね。」

「……」

三秒ほど目はあつたけれど、彼女はすぐに視線を外した。

「この子はひとみしりなのかな？」

かなりポジティブな俺は返事がつてこないことはあまり気にならなかった。が、相手からするとかなりあやしい男に思われてもしかたがあるまい。

「ほれって阿波踊りの笛？」

彼女はうつむいたままうなずいた。かなりあやしい目で見つめてきた。

「阿波踊り好きなん？どつかの連にはいつとん？」

彼女は首を横に軽く振った。

「君やつぱり人見知りなんやな！。徳島の子やろ？おんなじ徳島同士仲よろしうや。あ、別にナンパとかそんなんでないんでよ。」

「……」

「俺は森下晃。晃ちゃんてええよ。近くのワイン屋手伝い寄るんよ。」

君は？」

「……、小雪、真杉小雪。」

やっと声が聞けた。ってかやっとしゃべった。

彼女は黒っぽいストレートのロングヘアで、暗くてよくは分からないが、肌の色も白っぽい気がする。

「小雪ちゃんかぁー、もう話もできるようになったけん、友達やな笑 小雪ちゃんは仕事何してんの？」

「あたしは喫茶店で働きよるん。」

少しだけだが、彼女がほほ笑んだ気がした。

「笑ったら結構かわいいで。」

「……そんなことないよ。自分のいいとこやどこにもないし。」

おお、ちよつとマイナス思考？

「笛よかったよ。生で笛だけって聞いたことなかったから、めっちゃしんせんだった。阿波人なのにな。」

「そんな気使わんでもいいです。」

おおお？かなりマイナス思考やなこれは。

「もっと吹いて吹いて！」

「じゃあ……あと一曲だけ。」

と、猫背ぎみだった背中がすつと伸び、笛を唇にあてた。吹いているときはさつきとはまるで別人のようになる。

吹き終わると彼女はすぐに笛をつまみ帰る準備を始めた。

「もういぬん？」

「うん、そろそろ帰らんと。明日も仕事やし。」

「なんか小雪ちゃん心に重たいものを抱えてる気がする。こんなにきれいな笛吹けるのに顔が元気がない気がする。」

「……」

「来週もこの桜の下のベンチで待つとるけん。笛また聞かしてな。

あとおれでよかったら話ぐらいだったら聞けるよ。人に話すだけで大分違うと思う。仲良しの友達に話すより案外はなししやすいかも

よ。」

彼女は表情を変えることなくこつくりとうなずいた。

彼女と別れて両国橋を渡り愛車のビュートを止めている駐車場までゆっくりあるいていた。なんか男の俺が言うのもなんだが、心が浮かれているような気がする。

「やっときーやっときやっとき。私の心も浮いてきた。浮いた心は阿波踊り。あ、やっときー、やっときやっとき。なーんつつて。」

あんまり変な表現だが、毎週火曜日が楽しみになったのは間違い。これは恋心なのか友達心なのかは分からないが、両国橋をスキップで渡っている姿は周りからはかなりの不審人物のように映っていただろう。橋のたもとの交番のお巡りさんも冷たい視線。

いいんじゃないんじゃない。はよう来週こんかいな。

第二章、彼女の心

朝、午前お酒の配達に俺は向かっていた。車を運転しながら昨日のことを思い返していた。なぜ彼女はそんなに悲しそうな顔をしていたんだろうか。ふと信号待ちの時歩道を楽しそうに歩いている若い女の子たちの姿が目飛び込んできた。

「小雪ちゃん大体あの子らぐらいの年代だったよな……。あの年代なんて一番楽しい時期やん。」

その日のお昼、友人のあや子とランチをする約束だった。あや子は俺の友人の慎の彼女だ。来年結婚も決まっている。俺、慎、寛、あや子は昔っから仲がいい。今日はあや子の要望でランチはパスタになった。富田町の隣の銀座にある、徳島の素材を使った体に優しい健康指向のイタリアンだ。

俺は配達が少し手間取ったせいで、約束の時間十五分少々遅れてしまった。

「すまん、すまん。仕事終わるんおそなってしもつて。」

あや子はほつぺたを膨らませ、変顔でこっちをにらんでいる。

「遅い！今日は晃ちゃんのおごりやな。」

「いらっしやいませご注文お決まりでしょうか？」

「えっと、小海老のトマトソース冷静パスタが一つ、四種のチーズピザひとつ、阿波お鳥のから揚げひとつ、クラムチャウダー二つ、生ハムサラダ一つ、デザートにコーヒーのブラマンジェ一つ。晃ちゃんは？」

まじかよ、こんなに食えんのかよ……

「じゃあ、ミネストローネとたらこのパスタで。」

こじんまりしているお店なのですぐにお客さんでいっぱいになってしまう。先にあやちゃんが席取ってくれてたから助かった。けっこうこおいしいんじゃよな……

「憤これなかつたんだね。」

「そうなの、月末だと忙しいみたいなの。」

憤はコーヒー会社に勤めていてコーヒー以外、業務用食品なども配達したりしている。

「なあ、あやちゃん、俺は男だから女の子の気持ちや分からんけど、若い女の子がすごい思いつめたような顔してる時ってだいたいなにに悩んでるんやろか？」

「なにに？ 晃ちゃんにも春がきたん？ うまいこといつてるん？ 一緒に合同結婚式しちゃう？？」 笑

「ほんなんではないんやけど、偶然知り合った女の子がおって、なんか心ん中になんか重たいもん抱えとるみたいに見えると言うか、だいたい女の子の悩むのってどんなことなんやろと思て…」

「ほんまに晃ちゃんはやさしいなあ。」

注文したお皿が次ぎ次ぎに目の前に並んできた。

「隣の机の上におかせていただきますね…。」
ちよつと呆れたなスタッフ。こんなに食えんのかよと思っ
て
いる
の
であ
ろ
う。

大きな口にパスタをほうばるあやちゃん。見ている方が気持ちよくなるくらい食べている。

「で、晃ちゃんはその子に一目惚れしたん？」

あやちゃんの視線がちくちくささつてくる。ちよつとニヤケながら。
「ほうやなあ… だいたい年頃の女の子の主な悩みはだいたい、彼氏の事か親と上手くいかない事か友達関係ぐらいと思うけど… まさかその若さでローンで首が回らないとかそんな難しい事じゃないと思うよ。」

「なるほど… やっぱ女の子のことは女の子に聞くのが一番。うんうん。」

「あ……あとそれと、心の風邪とか……。」

あやちゃんはクラムチャウダーをすすっているスプーンをいったん置いた？。

「心の風邪っていうのは??無知ですまん。」

「うーん、つまり心の病気。うつ病とかじゃよ。」

そっぴいながらまたあやちゃんはおいしそうに料理を食べだした。

第三章、涙の泉

俺は、一日の仕事を終え、パソコンを開けた。お昼あやちゃんが話してくれたことが気になったからだ。なにぶん無知なので勉強がてらに。

深夜、慎の会社のコーヒーを入れパソコンにいそいそと向かった。

「う・つ・病・・・つと。ENTER、ぼん。」
ずらーっと画面いっぱい検索結果が出てきた。うつ病のほか、精神病、パニック障害、強迫性障害・・・などなど。自分には無縁だった言葉がたくさん並んでいた。症状について細かく説明しているサイトや、病院の先生が作っているサイトや、体験者、体験中、その家族の日記を載せたもの、克服者などのブログ。自分の家から近い病院を検索出来たり、こんな表現は不敵切かもしれないがかなり充実しているようだ。ということは、これだけのこの病気に対して関心を持っている人、体験者や悩んでいる人、などたくさんいるということであるには間違いないであろう。もしかしたら小雪ちゃんも本当にあやちゃんが言うようにそうだったら、と思うと、少し心配になった。あの日小雪ちゃんが吹いていた横笛の音色頭に浮かんだ。

ぐーっと冷めてしまったコーヒーを一気飲みして、は寝床についた。

そして小雪ちゃんと約束した火曜日がやってきた。夕方の配達中道端で偶然慎にであった。慎も会社の配達中のようにだ。カートにたくさんコーヒー豆や、缶をたくさんのお茶店に運んでいた。

「晃ちゃん例の火曜日やね。」

「ん？何で知ってんだ？？」

「ああ、あやちゃんから聞いたん？」

「かわいいんこの子？」

ニヤニヤしながら聞いてきた。いわゆる定番の友人の冷やかしかたであ

るう。

「ああ、かわいいよ。親友のお前にははつきり言いたかったんやけど、じつは一目ぼれしたんじゃ。」

慎はへーっていう顔して俺を見ている。

「慎まだ配達中だろ？早くいけよ。おれもワイン配達中やけん。またゆっくり話聞いてだ。」

「おう！がんばれよ！ほなな。」

お互いそれぞれの配達にもどった。

夕方の配達を終えいったん家に帰り、仕事でかいた汗をシャワーでさっぱり流し、身支度をした。桜の木の下で出会ったから、桜の花びらが小さく散っているように描かれた黒地のロングテイーシャツとまだ二月なので寒いので、ブラウンのダウンジャケットをセレクトした。

俺はいいそいそと少しスキップしながら、両国橋を渡って、桜の木の下へ向かった。彼女のことをもっと知りたい、自分のことも知ってほしいいろいろな気持ちがあつてつまり緊張気味にむかつた。

「えとぶり！小雪ちゃん元気だった？」

白い少しふわつとした帽子をかぶり、グレーのコートにブルーの柄のワンピースの小雪ちゃんはこっくりとうなずいた。かばんには横笛がひよこつと顔を出していた。

二人で早咲きの両国の桜の木の下のベンチに座った。今日は先週とは反対の位置に座った。

「ずっと考えよったんよ。あんなにきれいな笛の音が吹けるのになんで悲しそうな顔してるんかなって。ずっとときになつとって。話したくなつたらいつでもいうてな。気つかわんと。」

小雪ちゃんはうつむいたままだった。

「けど本間にここの桜は早咲きやし綺麗よな。」

「みんな、あたしの話聞きよつたらみんな暗くなっていくん。最初

はみんな話聞くよって結うけど、実際みんな困った顔していくん。ほなけん自分は何でこんな気持ちになるんかわからんけん話を聞いてほしかった、最初は。けどだんだん口には出したらいかんとおもて。」

俺ははじめてこんなにしゃべっている小雪ちゃんを見た。

「それは簡単にいえば、相手の人の頭の中はパソコンみたいに人それぞれ、頭の中のキャパがあんるんじゃ。小雪ちゃんが50パーセントぶつけたとしよう。ほなけんその相手に取ったら100パーセントかもしれない。相手のキャパがいっぱい、いっぱいになったら、相手の容量がいっぱいになってパニックになつてしまふんやと思うよ。ほなけん困つてるように見えるんでないんかな？」

「晃ちゃんも困つてしまふ？」

「すぐるような瞳で彼女は質問してきた。」

「小雪ちゃんのキャパが100パーセントなら俺のキャパは150パーセントやから全然余裕じゃよ！」

にーって笑顔で小雪ちゃんに笑いかけようと横を向いたら、小雪ちゃんは大きな涙の粒をぽろぽろとこぼしていた。

第四章、真夜中の光

小雪ちゃんの泣き顔を目の前に、俺はびっくりした。悪いことを言ってしまったのではないかと思ひ必死にあやまった。

「小雪ちゃんん、悪い気さしてしもうたかな・・・？ほんまにごめん。小雪ちゃんのためになんか言うてあげてかって。」

涙でほほを濡らした小雪ちゃんがこっちを向いて、

「ありがとう・・・。ほんなこというてくれたん初めてじゃよ。ほんまにありがとう。」

よかった、おれはそう思った。喜んでくれてるんだって。おれの些細なひと言で少し笑顔も見せてくれた。

「毎日自分でもなんでかはわからんけど、気分が落ち込むん。毎日毎日。朝目が覚めても毎朝悲しい気持になつて朝起きるのが怖い起きてたら悲しいことばっかり考えてしまふから、カーテンも全部閉めきつて光を閉ざすの。朝はみんなに平等にくるのに、自分の中に朝を迎えたくない、逃げてるの。」

小雪ちゃんの涙は止まりかけていたが、またあふれてきそうだ。

「悲しい気持ちになるつてたとえばどんなことを考えてしまふん？」
慎重に、小雪ちゃんをなだめるようにおれはたずねた。

「本当にいるんなこと。考えても仕方のないようなことまで考えてしまふんよ。十二色の絵具を一気ににぐちゃませにしてみた。あの時自分で気付いてしまったの。自分は世の中の流れに乗り切れないのかもつて。世の中に自分だけ取り残されてるような気がしてその世の中の流れに乗り切れていない自分が悪いんでないんかと思つて。」

スーッとひんやりした風が二人を通りぬけていった。一緒に桜の枝もゆっくりゆれた。

「それから、だんだん友達付き合いができんようになってしまつてね。はじめは何でそんなこと考えてしまふんだろつて思つて、聞

いてくれる友達に話して聞いてもらってたん。でもだんだんもみんな困っていくことに気付いてしもうたら、相手にもうし訳ない気がしてきて。一緒に遊んでても暗かったらみんな気つかうでしょ？ほなけん今は家族とも友達とも距離をおいている。」

「こんな若い子女の子がそんなことを考えてるなんて晃は信じられなかった。俺考えてこたなかった。確か小雪ちゃんはおれの九つ年下から二十歳だったよな？おれが二十歳の時は友達と何して遊ぼうかなって考えたり、その時楽しかったらいいみたいだな考えただよな。あまりにも違いすぎる考え。」

「今は知り合いの紹介で治るかどうかわからんけど、メンタルクリニックに通って様子を見よるよ。今はこんな感じ。」
彼女は少しにつこりしていった。

「ゆっくりでいいからこれから元気になれるように一緒に考えよう。」

小雪ちゃんは少し驚いたように

「晃ちゃんはがんばって言わなんだね。」

「当たり前じゃん。十分がんばって考えながら生きてるんやから。」

「こういつたときはネットで見たぞ。「がんばれ」っていつちやいかんというところ。かなり相手の負担になるらしからな。」

「番号とアドレスまだ教えてなかったね、赤外線しようつか？」

「うん。晃ちゃんならいいかな。最初は変な人かと思ってたけど。」

「やっぱし??笑」

小雪ちゃんから笑顔があふれた。そして両国橋の上で今夜は二人笑顔で別れた。

第五章、水鏡

あの夜から二日はたった。小雪ちゃんからは連絡はない。俺からも気恥かしくてまだメールも打ってない。俺は考えていた。小雪ちゃんをデートに誘ってみよう。そのことで慎に聞いてもらおうと思ひ、電話をかけようとした。と、同時に慎からの着信。

「もしもし慎？今おれもちょうど慎に電話しようと思つて電話握つたところ。奇遇やな。」

「ほんまに？いやおとこの火曜日どうだったんだろつと思つてなあ。」

「まだ連絡もこんし、俺からも連絡してないんよ。で、ちよつと、デートに誘おうと思つて、おれの案聞いてくれるか？」

「おう、で、どんなんだ？」

「小雪ちゃんは笛でお囃子を吹いていた。だからきつと徳島らしいところがいいと思うんや。徳島の奴つて案外地元のお勧めスポットとかはいかないだろう。できたら、小雪ちゃんに阿波踊り見せてあげたいんやけんどな・・・。」

「晃ちゃん、いいところあんでえ徳島に。眉山のほうにある阿波踊り会館が。あそこは毎日有名連が日替わりで踊りこんでるでえ。」

「おう、ほうじゃほうじゃ、そんな建物あつたな！」

「慎ちゃんやんで！ほれありやな。小雪ちゃん喜んでくれるかもあそこは県外客が多いけんきつと小雪ちゃんもいったことないやろな。うんうん。」いろいろ二人で話しているうちにだんだん内容は固まってきた。

「慎ちゃんありがとな。」

「おう、お互い様じゃ。僕の時も晃ちゃんによつてもらつたけんなあ。がんばれよ！」

でアドバイス、激励をつけ電話を切つた。なんかまた男同士友情を

深めた気がするぞ。慎ちゃんありがとう！

そう、慎ちゃんとあやちゃん二人が結ばれたのは、自分で言うのもなんだが、実は俺のお陰でもある。

中学から仲良しの俺たちが、あやちゃんが慎の事をずっと思っていたという事に気がついたのは、高校卒業するぐらいだった。

あやちゃんの性格上、慎に好きな子ができようと、彼女ができようと、慎を思う自分の気持ちを押し込んで、ずっと励ましたり、応援したり、助けてあげたりと、懸命に思い続けていたのだ。見るに見かねて、二人を引き寄せようと走り回った、つまり二人のキューピットになったわけだ。幸い、見事二人はカップルになったわけだ。お互い思いやり、助け合いながら仲良くやっているようで嬉しく思う。

しかし、自分のこととなるとなかなかすっぱりしない。しっかりする俺！よし、とりあえずメール送ってみようか。

さて、初めてのメール何を打とうか……。やはりシンプルにがいいか。

『小雪ちゃんこんばんは。元気にしよるで？、来週の火曜日一緒にでかけへんか？返事待ってます。晃ちゃんより』

「よし、そーしんつつ！ーうおりやつつポソ。」

恥ずかしながら俺はドキドキしながら返事を待っていた。気持ちは正に年頃の少女のようだ。(笑)

返事は十分もたたないまま返信が返ってきた。

「お、もんでつきた。OPEN!!ぽん。」

いれたてのコーヒーを一口くちをつけた。そうこうするうちに返ってきた。

メールにはひらがなで、

「こうちちゃんたすけて」

第六章 そよかぜ

一瞬意味がよくわからなかった。なんでだ？なんでだ？なにかあったのか？

急いで小雪ちゃんのケータイにかけてみた。五回目のコールでやっとつながった。

「小雪ちゃん大丈夫か何かあったん？」

「はーはーあ、はーはーあ、うつつ・・・うつつ・・・」

電話口で呼吸が明らかにおかしい音が聞こえて、苦しそうにないているようだ。

途中で電話は途切れてしまい、あせった俺は、無我夢中で小雪ちゃんが働いていると聞いていた喫茶店へ車を飛ばした。

道路の信号機なんてなければいいのに・・・はやく、はやく、彼女の元へいきたい。あせってばかりだった。

車で行けばそんなには遠くはない距離だが、なぜだか焦っているせいか、遠くかんじていた。

頭から車を駐車場につつこんで、急いで小雪ちゃんが働いている喫茶店に入った。

「いらつしやいませー。」

お店の定員さんが声をかけてくれた。

「小雪ちゃんの知り合いのものですが、何かありませんでしたか？」

そういうと、困ったかを押して

「そうなんです。急に様子がおかしくなって・・・。どうぞ奥へ・・・」

そういうと店の奥へ案内された。

奥のソファーには喫茶店の制服姿でケータイをにぎりしめたまま横たわっていた。

「小雪ちゃん、大丈夫？」

そっと肩をゆすってみた。

「う……んん……?」
するとそつと小雪ちゃんの目が開いた。

「こつちゃん……。」
少し安心したような表情だったうに見えた。同じように俺も安心した。

「一体どないしたん? 具合悪かつたんえ?」
手で家をお覆いながら、

「ちよつと……。たまにあるんよ。急に呼吸が苦しくなるみたいで……。過呼吸になってしまふんよね。そのときはどうしようもなく不安になってしまふん。」

「今日はもう上がってもいいわよ。」
お店のスタッフが声をかけてくれた。

「ほんとうにすいません……。」
そつと小雪ちゃんはおきあがった。俺は小雪ちゃんの背中を支えながら、二人で店を後にした。

「車で送っていくよ。」
「もう大丈夫。わざわざありがとう。驚かしてごめん……。呼吸が安定したらもう大丈夫なの。病院がすぐそこなん。ちよつとよつてからかえるね。」

そついうと彼女は北のほうへ歩いていつてしまった。

俺は両国のほうへ向かった。桜の木下のベンチに腰掛けていた。彼女にとつて俺は何ができるのか……。彼女のために何かしたい。やっぱり好きなんだと確信してしまった。

俺は携帯を広げてメールを打った。
「小雪ちゃんに話があるんだ。体調がよければいいけん、明日夜の9時に両国橋

の桜の木下のベンチでまつとるけん。」
まだまだ外は冷たい風が吹いていて耳がじんじんしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4136g/>

LION HEART

2010年10月20日19時29分発行